地域再生計画

１　地域再生計画の名称

スノーバレーボールをキーワードとした地方創生事業

２　地域再生計画の作成主体の名称

宮城県刈田郡蔵王町

３　地域再生計画の区域

宮城県刈田郡蔵王町の全域

４　地域再生計画の目標

４－１　地域の現状

【地理的及び自然的特性】

本町は、宮城県の南西部に位置し、東は村田町、西は蔵王連峰を境に山形県、南は白石市、北は川崎町に接している。海抜の最高は西端の屏風岳で 1,825m、最低は東南部の松川と白石川の合流点で 20m、町面積は 152.83 ㎢で町域の 85.18 ㎢が山林原野で占められている。一方で、耕地面積が広く、果樹生産では県下一の生産量を誇る。西部は蔵王国定公園に含まれ、御釜に象徴される大自然が広がり、遠刈田温泉等が蔵王観光の基地となっている。例年、登山や高山植物鑑賞等を楽しみに多くの観光客が訪れるほか、山岳部には２か所のスキー場があり、12月から３月にかけて、スキー等のウインタースポーツや国内でも限られた地域でしか見ることができない樹氷の鑑賞などが楽しまれている。

【人口】

本町の人口は、1958 年の 17,141 人をピークに減少傾向にあり、住民基本台帳によると、2022 年で 11,490 人となっている。また、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、2040 年の人口は 9,062 人になると見込まれている。

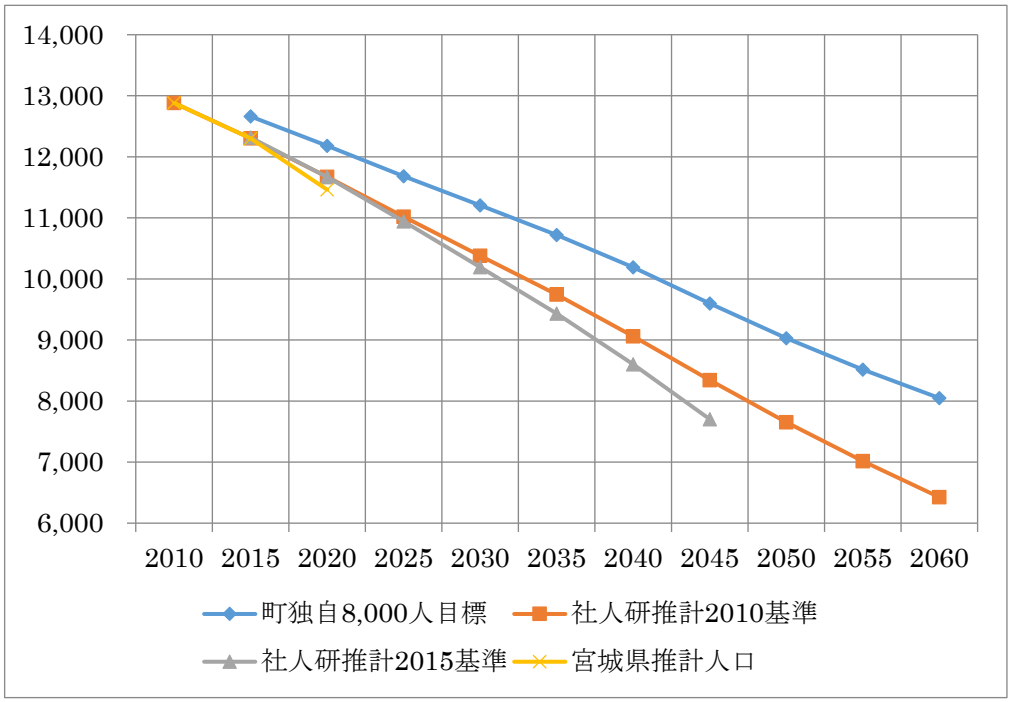
年齢３区分別の人口動態をみると、年少人口（14 歳以下）は 1955 年の 6,402 人をピークに減少し、2022 年には 1,172 人となる一方、老年人口（65 歳以上）は 1955 年の 934 人から 2022 年には 4,457 人と増加の一途をたどっており、少子高

齢化がさらに進むことが想定されている。また、生産年齢人口（15～64 歳）も 1955 年の 9,274 人をピークに減少傾向にあり、2022 年には 5,861 人となっている。

自然動態をみると、出生数は 1961 年の 303 人をピークに減少し、2020 年には 58 人となっている。その一方で、死亡数は 1981 年の 95 人から 2020 年には 189 人と増加の一途をたどっており、出生数から死亡数を差し引いた自然増減は▲131 人（自然減）となっている。

社会動態をみると、1966 年には転入者（781 人）が転出者（724 人）を上回る社会増（57 人）であった。しかし、本町の基幹産業である農業、観光業の衰退に伴い、雇用の機会が減少したことで、町外への転出者が増加し、2020 年には▲7 人の社会減となっている。

蔵王町人口推移



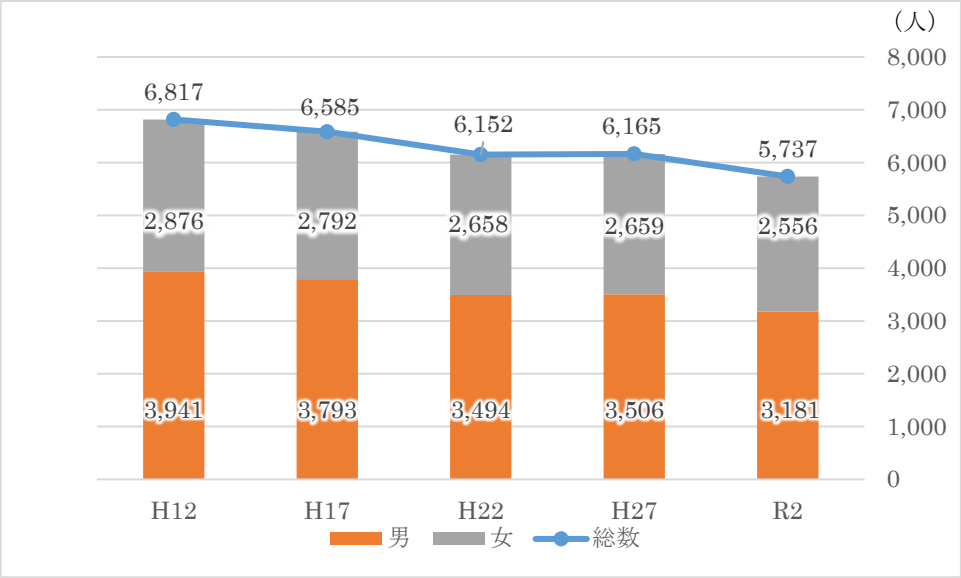
（出典：国立社会保障・人口問題研究所、蔵王町「蔵王町人口ビジョン」、宮城県「統計課人口推計（2018 年）」）

【産業】

本町は、基幹産業である農業と観光のまちづくりを進めているが、農業をはじめとする各種産業において就業者数の減少と高齢化が進んでおり、担い手の確保が課題となっている。就業者数は、2005 年から 2020 年にかけ約 1,000 人減少している。総農家数は、1990 年の 1,677 戸から 2020 年の 836 戸と約半数に減少し

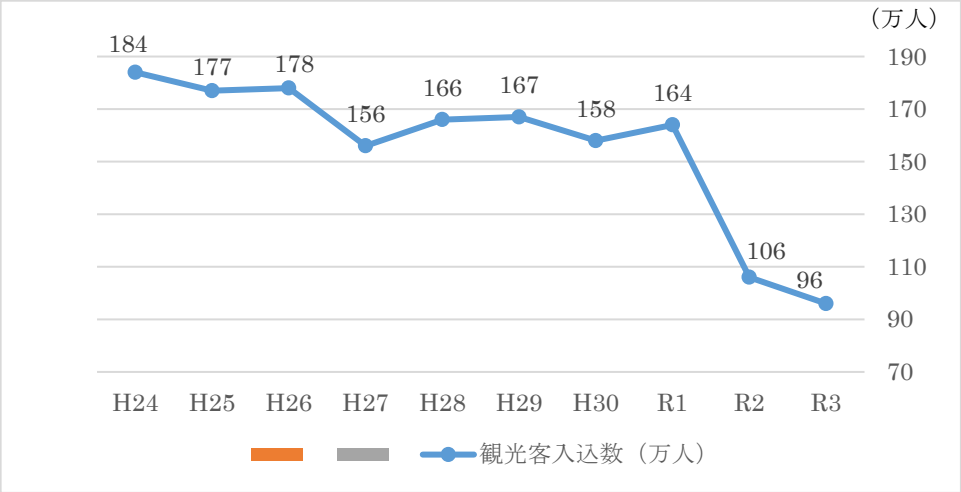
ている（1990 年・2020 年農林業センサス）。また、観光客入込数についても 2012 年から少しずつ減少傾向にあったが、2021 年には新型コロナウイルスの感染拡大の影響により 96 万人と激減している。

就業者数の推移



（出典：国勢調査（2020 年））

観光客入込客数



（出典：宮城県「宮城県観光統計概要（2020 年）」）

【スポーツ】

本町では、東京 2020 オリンピック大会の事前キャンプ（2018、2019 年）をはじめ、日本の蔵王ヒルクライム・エコ大会（2010 年～現在）や三遊亭円楽杯ゲー

トボール交流大会（2013 年～現在）等、全国から参加者を募り、交流人口の増加や地域活性化に力を入れてきた。大会等やイベントを開催することにより、スポーツ界における知名度や地域ブランドの向上、域外からのスポーツ参加者や観戦者を呼び込むことによる交流人口の増加や地域活性化を目指している。

しかし、本町のスポーツ施設は、総合運動公園のほかに、体育施設及びグラウンドが６か所あり、これらが地域住民のスポーツ活動の場として利用されているものの、施設の利用者が固定化され、新規利用者が減少しており、さらにコロナ禍により活動が自粛気味となっている。

また、町内に２か所あるスキー場（みやぎ蔵王えぼしリゾート、マウンテンフィールド宮城蔵王すみかわ）では、町内小中学校のスキー教室を行い、冬季スポーツの楽しさを伝えてきたが、スキー場利用者は 2011 年の 181,802 人をピークに 2022 年は 96,220 人と減少しており、冬季期間の観光産業の衰退が危惧されている。

こうした中、近年注目されている冬季スポーツが 2030 年の札幌オリンピックで公開競技となる予定の「スノーバレーボール」である。スノーバレーボールは、本町の自然の特性を生かしたスポーツであり、町民の運動率向上や、新規スポーツ人口の獲得だけでなく、観戦者としての観光客の誘客を促進し、交流人口の増加と地域活性化につなげていくという点で本町に適している。

４－２　地域の課題

４－１に記載のとおり、本町の基幹産業である農業、観光業の衰退に伴い雇用の機会が減少したこと、生活の利便性が高くないこと等が要因となり、若者の転出の増加が進み、現在では人口はピーク時の 1958 年の約６割となっている。このまま人口減少がさらに進行した場合は、町の経済の衰退や過疎化が懸念される。

４－３　目標

４－２に記載した課題に対応するため、冬季期間のスポーツとして、町内にあるスキー場でのスキーやスノーボードだけでなく、新たなスポーツとして「スノーバレーボール」を通じて、日本各地に本町の魅力を知ってもらうとともに、大会を開催することにより、地域のチーム設立等、スポーツ人口の増加にもつなげ

る。

そして、本町の自然豊かな地域の特性を生かしたスポーツを推進することにより、住民の運動意欲の向上と、本町に魅力を感じている人々の取り込み、スポーツから始まる交流人口の増加や地域活性化を図っていくことで、人口減少を食い止め、町内経済の衰退を防止する。

【数値目標】

ＫＰＩ	現状値 （計画開始時点）	目標値 （2024年度）	達成に寄与する地方版総合戦略の基本目標
スノーバレーボール大会　参加者数（年間）	０人	24人 （６チーム）	基本目標１
スノーバレーボール体験会参加者数（年間）	０人	90人	基本目標１
スノーバレーボール大会　来場者及び関係者数（年間）	０人	300人	基本目標１

５　地域再生を図るために行う事業

５－１　全体の概要

５－２のとおり。

５－２　第５章の特別の措置を適用して行う事業

○　まち・ひと・しごと創生寄附活用事業に関連する寄附を行った法人に対する特例（内閣府）：【Ａ２００７】

①　事業の名称

スノーバレーボールをキーワードとした地方創生事業

②　事業の内容

スノーバレーボールをキーワードとした地方創生事業の内容として、１年目は、男女３チームのトップ選手によるエキシビジョンマッチを行い、地域のバレーボールチームや観戦者を対象にスノーバレーボール体験会を

行う。２年目、３年目は、スノーバレーボール国内大会とスノーバレーボール体験会を開催する。

本事業は、第２期蔵王町まち・ひと・しごと創生総合戦略の基本目標１「稼ぐ地域をつくるとともに、安心して働ける地域を創出する」における基本的方向（２）「蔵王町の『観光力』を高める観光戦略の推進」に位置付けられる事業であり、当該基本目標１のＫＰＩである「観光客入込数」の達成にまさに寄与するものである。

③　事業の実施状況に関する客観的な指標（重要業績評価指標（ＫＰＩ））

４の【数値目標】に同じ。

④　寄附の金額の目安

30,000 千円（2022 年度～2024 年度累計）

⑤　事業の評価の方法（ＰＤＣＡサイクル）

毎年度５月頃に「蔵王町まち・ひと・しごと創生推進本部会議」及び外部有識者による「企画審議会」において実績と効果について検証を行う。検証結果については本町ホームページ等で公表する。

⑥　事業実施期間

地域再生計画の認定の日から 2025 年３月 31 日まで

６　計画期間

地域再生計画の認定の日から 2025 年３月 31 日まで